

初等部

2024年度教育活動

初等部部长 高橋 出

久しぶりのコロナ感染症による行動制限のない解放感を感じる始まりであった。高学年の子ども達は低学年の時に5, 6年生の姿を見ながら生活することが少なかったため、特に6年生は上級生として学校生活をリードしていくことに苦労することが多かったと思う。しかし新しい活動を生みだして創立97年の初等部を、理念と共に新学園長の新しい風を感じながら歩んだ1年だった。

I:キリスト教精神に根ざした人間教育

一人ひとりを大切に

宗教主任の後藤田先生の後任に松坂先生が着任され、初等部の学校生活の土台に讃美歌を歌うこと、祈ることは、なくてはならないとあらためて感じた1年であった。礼拝は各学年で朝、教室で行い、不定期に学園長と部長が担当することは昨年と変わらないが、松坂先生にも礼拝をお願いした。先生の礼拝が大変新鮮であり、キリスト教への想いを教職員がより深めることができた。また中、高等部と繋がることができ初等部のキリスト教的価値観をどのように普段の生活の中で自然な形で植え付けていくかを度々考える1年となった。

II:一人ひとりのケアと尊重

今年度も教育相談コーディネーター中村の役割を子ども、保護者、教員も理解し、一人ひとりを大切にする初等部の支援体制によって問題や課題解消できたことは嬉しいが、限界を感じることも一方で多くあった。毎週の支援会議と普段からの情報共有を心がけた。今年度より3年生以上は全児童個別面談を取り入れ、その後保護者面談を行った。また懇話などお互いを尊重する意味を考える機会を捉えつくり、成果もあった。一人ひとりのケア、尊重について模索し相談した。サポート内容も同じものではなく、まず状況を把握してチームで当たってきた。年々複雑化する社会状況の中で多種多様な事例が増えてきている。

III:学習する学校、生活即探求

一斉・グループ・個別・教室外と本来の初等部の多様な学習に更に自由進捗・縦割り・発表・探求などに、より子どもが自ら学べる楽しさを味わえる環境を整えたいと「学びの発表会」を「JIYU のひろば」と名称を変え、毎年行うこととした。今回も多くの保護者に来校いただき、活気のある「JIYU のひろば」を開催でき子どもたちはもちろん、私たち教員も達成感を感じられようになってきている。

教わるのは初等部の先生のみという固定観念を子ども達から取り除き、卒業生、大学部の教員、外部の教員など初等部の先生以外からも学ぶ体験ができる環境を整えた。「先生はどこにでも」の精神で学べる環境と、教員の役目が教えるに終始せず、時には伴走、コーディネーター的な立場で子ども達の探求できる環境を今後も整え続けたい。しかし何と言ってもまず教員が学ばなければ子ども達への新しい学びの環境を作り出せないと考え、各地の学校に数回に渡り多くの教員が足を運び、学び続けようとするチームになりつつあることは嬉しい。

また、宿泊学習もより初等部らしい内容を検討し続けている。普段の生活や学習とつながりのある体験や気持ちよく友だちと過ごすための準備など学校だからこそできる宿泊学習を模索している。

IV:よりよい社会の小さなモデルとしての学校

従来からある昼食の司会進行、生活時間を知らせる鐘鳴らしなど学校を運営する上でなくてはならない役割のほか

に6年生の9個の委員会活動に子ども達のアイデアで初等部をよりよい学校にしようと取り組んだ。自分たちの学校を自分たちで良くするには対話が必要だが、学年を問わず全校児童の懇話をしたいと子どもの発案で実行できた。その一例として楽しい全校遠足にしたいと家族の縦割り班で対話し、遠足にのぞんだ。実社会は異年代で成り立っている。子ども時代から年上と年下の異年齢で対話することは誰もが安心して自分の意見を話せることがよりよい社会をつくるための第一歩だと考える。引き続き対話を大切にしたい。

V:教育環境の整備、働き方・休み方

児童の年齢が小さいことを考慮して初等部体育館に空調設備を整備していただいた。近年、特に夏場には高温と湿気で室外ではもちろん体育館内でも運動ができない状況になっていたため、体育館で快適に過ごせ安全と安心を得られた。それは子ども達のみではなく最も体育館で授業を行う体育教師の働く環境も整えられたことが嬉しい。教師の年間出勤カレンダー導入後、残業時間の減少、忙しい中にあっても計画を立てた仕事を意識して働きつつある。また打刻することで個人、初等部としても仕事の仕方に変化が現れてきている。

2022年度から5、6年はひとり一台タブレットが学習道具として加わったが課題は多い。適切な学習のツールとして活用したい。

BLEND導入により個人成績、事務処理が進みつつあり年度末、春休みの業務が簡略化され教員の負担がかなり軽減した。引き続き業務の見直しは必要だが、単に軽減、軽減ではなく吟味をした上で変えられることはすぐ変えていく方向で進めている。教員同士の親睦を深める機会が数回あったが、今後も教員の心身の安定につながるような交流を様々な形で図りたい。

VI:新しい広報・教育内容の発信

広報室初等部担当藤原と説明会をはじめ新企画、地域と

つながるイベント企画、幼児教室訪問などを行った。6年生が活躍する説明会も定着し、参加者に子どもらしい成長の姿をご覧いただけている。教育内容発信は誰もが立場を越えて学ぶ楽しさを味わえる1日にと考えた「JIYU のひろば」を行い子どもも保護者も、参加された方々にとって初等部が活気に溢れる学びのひろばの1日となった。子どもが主体の探求的、永続的学びを推し進めたい初等部教育の行く先を実感できた。また美術校内展覧会も行い初等部の美術教育のレベルの高さと生活の中から生まれる作品、自分の表現したいことが安心して表現できる、これが初等部の美術教育であることを再確認できた。

VII:経営基盤とネットワーク 永続的发展を支える組織構築

今年度は新1年生28名(生活団幼稚園からの内部進学者数は昨年度より2名多い9名)、全児童数195名で始まった。また国内外からの転校希望の問い合わせや見学が増加し、転校生も増え定員近くまで児童数を伸ばしている。中等部への進学者数は17名だった。担任2人制の利点を生かしていねいな子ども達の学習、生活の成長を見守っている。この2人担任制は今後少子化が進む中、より丁寧な教育を実現することで、児童数確保につなげるねらいもある。公立小学校はひと学級35人政策を打ち出した。35人という数が私立小学校にとってどのような影響があるのか動向を注意深くみながら2人担任制をさらに子ども達にとっても教員にとっても安定的、かつ発展的学校経営のために進めたい。部署を越え組織を柔軟に捉えて学校発展のために協力関係をより強固にしたい。

VIII:アフタースクールについて (渡邊武俊)

—— 子どもたちの「100の声」に耳を澄ます——

子どもたちは、言葉にならないたくさんの「声」を持っています。小さなつぶやき、ふとしたまなざし。夢中で遊ぶ姿、描かれた絵、つくったもの、仲間とのやりとり……。

それはどれも、子どもたちが“今を生きる”言葉であり、その先の明日へとつながる大切なサインです。

2024年度、私たちは初等部の目標「聴き合う」を胸に、この“100の声”に寄り添いながら、放課後の時間を子ども達と紡いできました。

子どもの想いが受けとめられ、友だちと響き合い、やがて形になっていくとき。放課後は、ただ時間を過ごす場所ではなく、一人ひとりが物語を育んでいける豊かな生活の場へと変わっていきます。

学童保育では、子どもたちの声を受けとめる入り口として意見箱を設置しました。「困っていること」「やってみたいこと」「こうなったらいいな」……。

小さな紙に書かれた一言ひとことを掲示板で共有しながら、おやつメニューや夏休みの企画を子どもたちと共に考え、「声がかたちになる」体験を少しずつ積み重ねていきました。こうした動きは、ワークショップやさまざまなプログラムにも広がっていきます。

サッカー教室では、チームのコンセプトを大人が一方的に決めるのではなく、子どもたちと一緒に考える時間を持ち、こどもミーティングでは、「放課後に大切にしたいこと」を話し合い、ルールづくりにも挑戦しました。

5年生の「逃走中をやりたい！」という一言をきっかけに企画が立ち上がり、夏には水鉄砲を使った「逃走中」が実現。春休みには中高生がハンター役として参加し、子どもたちの声が仲間を巻き込みながら大きな活動へと育っていきました。

また、2月には児童作家・杉山亮さんをお招きする特別企画も実現しました。5年生と保護者の「ぜひ自由学園に呼びたい方がいる」という思いから始まり、子どもが自ら手紙を書いてお願いをし、当日は多くの保護者も参加するあたたかな時間となりました。

今年は、五感を澄ませ、全身で世界を感じるプログラムにも力を入れました。しょうゆを仕込んで時間をかけて育てたり、豚の脚から精肉してソーセージを作ったり、親子交流会では薪釜でお餅を蒸してついたり……。味噌づくりや塩麴づくり、飴細工や和菓子職人のお菓子作りでは、子どもたちのまなざしの真剣さが印象的でした。さらにオリジナルのアイスクャンディを考案し、イベントで販売するなど、創造力と実践力が光る場面も多く見られました。

夏の伊豆では、シュノーケリングやジオ探索、定置網漁の見学を行い、自然と海の営みを全身で感じる時間を持ちました。海を泳ぎ、海の地形を歩き、漁師さんの船に乗り、その朝に獲れた魚を自分たちで捌いて味わう。子どもたちにとって忘れられない体験となりました。

アフタースクールのこうした活動には、保護者の方々をはじめ、高校生インターンやボランティア、多様な人々が子どもたちと出会い、学び合う場が自然と広がっています。

子どもたちの何気ないひとことや、まなざしの奥にひそむ想いから、放課後の物語はいつも静かに始まっていきます。その声に大人や仲間たちが耳を傾け、応え合うことで、想いや願いは少しずつカタチとなり、新しい活動や学びへと育っていきます。

2025年は、そんな“誰かの一声から始まる何か”を、さらに大切に育てていきたいと考えています。子どもたちの100の声に寄り添いながら、保護者の皆さまとも手を取り合い、放課後という時間と空間を、より豊かに、より自由に描いていけたらと思います。



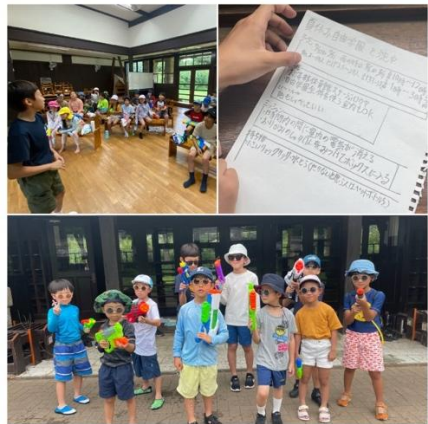
VIII-I：子どもたちが企画したおばけやしきは、入るのが怖い人のために「ちょっとこわい」コースを考えてつくっていました



- ・みんなでパスをつないで、みんなが楽しくなるサッカーをするチーム
- ・みんなで楽しくサッカーができるチーム
- ・自分たちでパスと行動できるチーム
- ・自分たちで行動できるチーム
- ・みんなが楽しめるチーム

- ②リパティアスユナイテッドってどんな人たちがいるの？
- ・色々なスポーツをやっている人がいるチーム
 - ・「絶対やめてやろう」って人がいないチーム
 - ・試合をしている時にあきらめる人がいないチーム

VIII-II：2年前から「みんなで楽しむサッカー」を合言葉に、子どもたちとチームづくりをすすめてきています



VIII-III：子ども企画の「水鉄砲で逃走中」。学園キャンパス全体をつかった逃走中は春休みに実施できました



VIII-IV:さまざまな体験プログラム



VIII-V:一人ひとりの物語が育まれています



VIII-VI:学童保育の交流会では、久しぶりに餅つきができました